

学生会議通信

東京教育大学

学生会議

68'9.16
No.19

年号スト、

試験阻止

由
す
る

○
○

創造せよ。

教育大の再編に抗し、斗ラ松美を創造せよ。

教育大のすべての堂友諸君、我々のスト。
ライキ斗争、本館封鎖斗争は、すでにハ十

日向を至過している。そして、現在こそ、防紅戦に終始せざるをえぬか、たゞ夏休せ」をのりきり、我々の斗いを反撃戦に転化してくべき重要な時点なのだ。学生会議大々にこの間の情セの推移を明らかにし、斗いの方向性を提起したい。

さて、商業報道等々によつても明らかなように、八月二十日には調査にか文部省に計上され、さらに二十八日、本館封鎖対策本部なるものなデレチ上げられた。この調査費計上こそは、「筑波はまだ最終段階ではない」となどといふ甘い幻想を一切仮想せしめ、調査ヒに關する學内段階における手続王の完了を意味してゐるし、本館封鎖対策本部もまたMP委と同様に、學内权力構構の中央集权化をより一層実質化していくものとして設置されているのだ。しかし、このよくな陰謀的かつ強行的な手続きによる移転推進の兼劫は、文学部教授会の推進派に対する反発と抵抗へ學問研究の膨張、本館封鎖対策本部の記者公見では、事務官の顔かずりと並んだという。このことは、言い換へば、筑波移転そのものの池田から佐藤への轉換にともなう性格の変容、さらには計画規模の縮少等々を要因として「筑波」に対する不安な一般的に増大し、それとともに積極的移転推進派がますますアブノーマルな手段でなれらの野望を実現せざるをえなくなっていること、そしてその唯一最大の支えとなるのは、文部官僚であり、その端的な表現として、本館をもつて、大學当局に最終的な打撃を与えた。

封鎖対策本部なる官僚的中央集权強压機構の設置があるのだしありも、このようだ移転推進過程自身が、つまり推進過程が生み出していく、教授会自治の空洞化、学生に対する高圧的な彈圧等々か、政府文部省にとてこの戦略的目標となつていることを見落してはならない。この間の、學内上层部による學内セ力の再編は、教授会を計すならハックとするといつより、むしろ事ム官僚に無限に接近し、従つてそれを媒介として政府文部省と一体化する方向性のモニナスすめられている。

我々の預り知らぬところで築様こえてゐるこのまうな効果のなみに、教育大の再編の、いや教育その再編のダイナミズムを見ておなればならぬ。その見解は、政府文部省の戦略目標となつてゐる「國大横路線」と呼ばれる國大也の大学自活に寄り、その再編のタクシムを見ておなればならぬ。ではなく、そ此政、そ此は決して、教育情セに対する全的規定にはなりえないし、また、坐社会秩序再編の方向性を把握するのでがない。教育大の窓をとおしてのみ、大學自治の窓をとおして世界を見なはならない。日本大學、東京大學、東洋大學等の全国園斗争のなみに教育大との同質性を見つけ出し、その流動する情セのなみに政府文部省の戦略目標と、それに対置すべき我々の斗いの質を確認しておなればならない。

一見、前近代的、封建的に見える古田会頭を中心とする日大の反効体制が、実は、日本の効向の最先端に合致し、それを支えるようなものとしてあるのだ。日大十万学友は、そのような大學に対して、(1)や大学を支える社会構造そのものに対して自分の銃火で抗争をもつて反逆を開始してゐる。東大も然りである。日大を始めとする諸學園斗争の我々の自らに対する制約性をはっきり自覺し、それらとの連帶を具体的にかちとつて、なぬはならぬ。

教育大の具体的な再編過程と帝曰主義アルジョージーの効向の照應関係を否定的に見つめ、その個別の攻セを末端部において一つ一つ粉碎していかねばならない。同時に、十・二一の安保粉碎、ペトナム反戦の政治ストライキを断乎としなちところ、本館封鎖解除の動きを一切粉碎し、年号スト・試験阻止をもつて、大學当局に最終的な打撃を与えた。